

## 悪, 悲しみ, 責任 ——意志以前のことがらからの出発——

西村 誠\*

### 1 自由だから責任がある?

責任能力という言葉がある。善悪を判断する力がある場合、その人物には責任能力があるといわれる。何が悪であるかを知らないで悪を行った場合には、諭されたり叱られたりすることはあっても、責任を問われないのであって、責任を問われるのは、或ることを悪だと知ったうえで、そのことを差し控えることもできたのに、敢えて実行に及んだ場合に限られる、ということである。責任能力の前提として挙げられる「善悪を判断する力」というのは、善悪についての知とともに、善悪のいずれをも選ぶことのできる自由ということを含むものとして考えられている。つまりは、自由だから責任がある、ということである。

しかし、はたして事態はそのとおりなのだろうか。私は、何が善悪であるかを本当に知っており、そして、善悪のいずれをも選ぶことのできる自由を本当にもっているのだろうか。悪とされることに身を委ねる場合はもちろん、善と思われることを実行する場合にも、私は自由に行為しているのだろうか。むしろ、自分でも突き止めたがたい動機に衝き動かされて、或るときは善と思われることを行い、或るときは悪とされることを行っているのではないだろうか。人間の行為が自由に基づくものではなく、何か得体の知れないものに由来すると感じられる限り、私は、その行為に対する責

任を問われること（あるいは、その行為のゆえに功績を帰せられること）に違和感をもたざるを得ない。私の実感では自分は自由ではないのに、本当は自由なのと言い含められているように感じるからだ。

もし事態がこのようでもありうるとするならば、私にとって、私が自由であるということは自明の前提ではないことになる。だとすれば、一人前の大人であって「正気」でさえあれば、誰もが責任能力を有するというのも自明ではなくなる。責任能力という言葉に対する違和感を私が払拭しきれない限り、自由にも責任にもどこか虚構の感じが付きまとう。その限りにおいて、自由や責任は、個々人が約束を守る（お互いに守らせ合う）ことで成り立つこの平時の社会が個々人に押し付ける掙えものであり、だからこそ、同じ社会が、非常時において個々人の自由や責任をかえって邪魔に感じるときには、今度は服従と責任解除とを個々人に一方的に告知することもできるのだ、という見方を頭ごなしに否定し去るわけにはいかない。

責任能力という言葉に対するこのような違和感に何か真実味があるとすれば、それは、責任の成り立ちについての因果的な理解にたいする疑念ということではないだろうか。つまり、私以前に私を或る行為へと促すどのような原因があろうとも、それは行為の十分な原因ではなく、与えられた行為の選択肢を前にして私がいずれかの選択肢に自由に同意するということがあって初めて、行為が生まれ、或る結果が生じるのであり、その意味で、行為とその結果の原因は私にある、だから、その

\*〒380-8525 長野市三輪8-49-7 長野県短期大学

\*Nagano Prefectural College, 8-49-7 Miwa, Nagano 380-8525, Japan.

行為とそこから生じる結果については私に責任がある、という理解の仕方に対する疑念である。もちろん、こうした疑念を抱く私自身も、私は行為の始元ではないから行為とその結果については責任がない、と言い立てる場合には、責任についてのこのような因果的な理解を受け入れ、それを盾にして責任回避を試みていることになるわけである。しかし、この責任回避のための言い草は、単なる言い逃れのための理屈だけではなく、言外に次のようなことを示唆しているように思われる。つまり、もし私に私の行為に対する責任があるとすれば、それは、私がその行為の自由な原因であるからではなく、責任はそれとは別のところにおいて成り立つのではないか、という示唆である。

この示唆に従うなら、次のようなことになるだろう。つまり、私自身は自分を自由な存在だと確認することはできないが、にもかかわらず自分に責任を認めることができるとき、私ははじめて自由だといえる、ということである。つまり、まず自由だから次いで責任がある、というのではなく、責任を引き受けることができはじめて自由という境位に至ることができる、ということである。

## 2 自由についてだけ責任がある？

責任についての因果的な理解の仕方は、責任を回避しようとする側にだけあるわけではなく、進んで責任を引き受けようとする側にももちろん見られ、そして、それがいっそう徹底した形をとることがある。

例えば、カントは次のように述べる。「この[総じて人間が自分の自由を使用する場合の]主体的根拠は、それ自身またつねに自由の働きでなければならない。(なぜなら、さもなければ、人間の選択意志を道徳法則に関して使用したり、あるいは誤用したりすることの責任が人間に帰せられえなくなり、また、人間における善や悪が道徳的なものとは言えなくなるからである)」<sup>1)</sup>

つまり、カントは、単に、目に見える個々の悪行が人間の自由由来するものだからその人間に責任がある、というだけではなく、そもそもこの人間界に道徳的な悪(の可能性)が入り来ったことそのこともまた人間の自由由来するのであり、したがって、人間の「悪への性癖」(「自愛の動機とその傾向性を道徳法則遵守の条件にする」)<sup>2)</sup>という性癖)は、自然においては必ずしも存在する必要がなかったにもかかわらず、人間の或る無時間的な「可知的所行」<sup>3)</sup>によって「われわれ人間自身が我が身に招いた」<sup>4)</sup>ものであり、したがって、われわれにその責任が帰せられる、としているわけである。

カントのこの「根本悪」説は、悪の責任を徹頭徹尾人間(の自由)に引き受けようとする、優れて倫理的な立場に立っている。そのことは否定しようがない。しかし、と私は思う。確かに、こうした倫理的立場への跳躍をなし得たとすれば、私は、悪の可能性すらも自分の自由によって我が身に招き寄せたのだと納得することができるだろう。つまり、自由だから責任があるのだ、と。しかし、もし責任についてのこうした因果的な見方(ここでは無時間的な自由の行使が問題になっているから、むしろ、根拠＝帰結的な見方と言ったほうがいい)を倫理の場においても採るならば、自由由来しないものには責任を取らなくてもよいということが帰結してしまわないだろうか(ちょうど先の引用文において、自由を使用する場合の「主体的根拠」が「自由の働き」でなければ、「選択意志の誤用」の責任を人間に帰することができなくなる、と言われていたように)。そのことは、さらに、自由ではなく、したがって、責任を引き受けることのできない存在は、責任を取り得る者たちの相互配慮の輪から締め出される、ということにも繋がっていかないだろうか。とりわけ、「道徳の国」<sup>5)</sup>がそれだけで完結性をもったものとして思い描かれる場合には。

私はここで、先に挙げた、責任回避の言い草が示唆していると思われる事柄に再び立ち戻ることになる。つまり、責任についての因果的な（ないしは、根拠＝帰結的な）理解の仕方は誤っているのではないか、という疑念である。責任について、それが自由に由来すると考える限り、自由であるということを自分に対する言い掛かりだとしか思えない者は、どうにも責任を引き受けようがなく、したがって責任に対して無責任のままにとどまり、他方、自らを自由であると解することができる者は、責任を引き受けることができるが、無責任の領域に対しては無責任にとどまる、ということになりかねないからである。むしろ、責任は自由に由来するのではなく、責任が初めて私を自由にする（ただし、絶対的ではなく、相対的な意味で自由にする）のであり、そして、責任それ自身は、（カントも先の「主體的根拠」について述べているように）「われわれ人間には究めがたい」<sup>9)</sup>ところから、つまりは、自然とも自由とも見極めのつかないところから、私の前に立ち現れようとしている、というのが、事態の有りように適っているのではないだろうか。もしそうだとすれば、善悪についても、まず悪があって、それに対する責任が問われ、その責任を引き受けることによって、私は相対的な意味で、悪から善に向かって自由になれ、そのことから、さらには善への希望をもつこともできる、という順序になるだろう。つまり、自由が先ず悪を生むのではなく、自由に先立って存在する悪との関わりにおいて自由の可能性が成り立つ、ということになるだろう。

だが、もし事態がこのようであるとした場合、果たして私は、自分の自由がその原因ではない悪について責任を引き受ける、などということが出来るのだろうか。

### 3 罪か、悲しみか？

この問いに対する答えに近づくために、私はこ

こで、ソ・ジュンシク<sup>7)</sup>の獄中での思索を取り上げたい。

1984年、つまり在獄14年目の夏、ソ・ジュンシクは家族宛の手紙に次のように記している。

「人間は、何のためにそうしなければならないのかよく分からないが、死ぬ日まで必死に生きなければならず、死んだ後にも種族を保存せねばならない。そのために必然的に経験しなければならぬ多くの害悪、すなわち、暗い欲望、悲しみと痛み、記憶から消してしまいたい悪行……こうしたものが私の言う『人間の悲しみ』に他ならない。これは、人間の獣としての悲しみだ。これは『罪』ではなく、ひたすら『悲しみ』と言うに尽きる。私と同じ姿形をしたすべての人間は、こうした悲しみの中で生きているのだ。悲しみに苛まれながらくたびれて生きていく『人間一般』を哀れまずにいられるだろうか。胸痛む同類意識なしにいられるだろうか。」<sup>8)</sup>

ソ・ジュンシクは、当時、激しい自己嫌悪に苦しんでいた。この手紙を溯ること10年、1974年に彼は、思想転向を迫る水拷問を受け、その苦しみのなかで「(思想転向を) 考えてみる」と獄吏に答えてしまい、監房に戻って激しい自己嫌悪に襲われて、手首を切って自殺を図ったことがあった。10年前のこの自己嫌悪は暴力に屈する自分の意志の弱さに対する自己嫌悪だったが、この手紙が書かれた当時の自己嫌悪は、それとは異なり、人間の「暗い欲望、悲しみと痛み、記憶から消してしまいたい悪行」に対する嫌悪から人間嫌悪、人間忌避に追い込まれてしまう自分というものに対する自己嫌悪だった。

当時彼は、獄中生活に伴う肉体的な不自由やさまざまな暴力に負けずに自分の志操を守り抜くために闘うだけではなく、「子ネズミのように卑劣で、ゴロツキのように乱暴で、ガキのように無分別で無知で驕慢で、愛もなく、棒切れのように情緒が干からびた」<sup>9)</sup>人間のあり方の一切を憎み、

そのようなあり方を自分から拭い去ろうとして、必死に自分と闘っていた。そうした闘いの裏返しとして、彼は、「卑劣、乱暴、無分別、無知、驕慢、愛のなさ、情緒の枯渇」を拭い切れない（自分を含めた）人間に対する憎悪、忌避へと追い込まれ、このように人間を嫌悪する自分をさらに嫌悪するという泥沼に陥っていた。「悪と不正と卑劣に対する憎悪のみならず、悪と不正と卑劣に対する憎悪に対する憎悪までもが、私の顔を歪めさせ、私の声を哽れさせた。私の心をひねくれさせてしまった。」<sup>10)</sup>このように彼は、「善と正義と高邁」を求めて獄中で生きようとすればするほど、かえって、「悪と不正と卑劣」にまみれた人間を断罪し、さらには、そのように人間を断罪する自分自身を断罪する、という苦しみの中にあった。

先に引用した手紙は、このような自己嫌悪の苦しみの中で書かれた。その苦しみの中でソ・ジュンシクは、「悪と不正と卑劣」を、人間が意志的に、自由の行使によって、我が身に招き寄せた「罪」なのではなく、「獣として」の人間に付いてまわる、人間のもって生まれた「悲しみ」であるとし、だから、「悪と不正と卑劣」にまみれた人間という存在は、罪ある忌まわしいものとして断罪、憎悪されるべきではなく、「胸痛む同類意識」でもって悲しまれ、哀れまれるべきだ、と考えるに至った。

ソ・ジュンシクがこうした「人間の悲しみ」という考えに至ったのは、彼が「悪と不正と卑劣」に対する責任から逃れようとしたからではないことは明かだろう。彼自身は（自分の中にもある）「悪と不正と卑劣」を「罪」と見なしてそれと闘う、強い意志をも持ちあわせていたからだ。しかし、そのようにして自分を「善と正義と高邁」の側に置こうとすればするほど、彼は自分が「歪み、ひねくれる」と感じないではいられなかった。その人間嫌悪の苦しみから抜け出すために、彼は、自分の中にもある「悪と不正と卑劣」を、

意志以前の「人間の悲しみ」として引き受け、「胸痛む同類意識」でもってそれを受け止めようとした。そして、その上で「悪と不正と卑劣」を克服するために再出発した。

どうしてこうしたことが可能だったのだろうか。普通、「人間って悲しい動物だね。」と言われる場合、「だから、この世の中に悪や不正や卑劣があっても仕方ないんだ。要するに、人間って不完全な存在なんだから。」という形で話が終わってしまいがちだからだ。しかし、それがソ・ジュンシクの場合には、「だから、世の中の悪や不正や卑劣を少しでも無くすために働くことが、人間の責任なのだ。」というふうに繋がっている。それはなぜだろうか。

「悲しみ」という言葉には、次のような意味で、否定と肯定の二つの側面が含まれている。つまり、悲しまれるべき対象は、まさに、悲しむべき、マイナスの価値をもったものとして突き放されているが、それと同時に、その対象を悲しむ者によって、悲しまずに放っておくわけにはいかないもの、救い上げずにはいられないものとして受け止められてもいる、という意味で。あるいは、こういうふうにも言えるだろう。つまり、「悲しい」という客観的事実だけではなく、「悲しむ」という主體的関わりが、「悲しみ」という言葉には含まれている、と。そして、それが「人間の（自分とその「同類」の）悲しみ」ということである場合には、いわば、「悲しい」事態が自らを「悲しんでいる」ということが起こっており、したがって、「悲しい」有り様という意志以前の事柄のなから、それを「悲しん」で、その「悲しみ」からの出口を求めるといって、ほとんど意志とも言えるような動きが起こっている。この動きは、たしかに、「法則の表象に従って行為する能力」<sup>11)</sup>、「ある一定の法則の表象に則って自らを行為へと規定する能力」<sup>12)</sup>としての意志ではない。かといって、それは、「法則に従って作用する」<sup>13)</sup>自然とも同じ

ではない。「悲しい」客観的条件に置かれていても自らは「悲しむ」ことをしない場合があるからだ。この、まだ意志とも言えない、だから十分な意味で自由ではあるとも言えない、しかし、もはや自然そのものではなく、いまある有り様とは異なった別の有り様へ至ろうとする動きが、「悲しみ」ということに含まれていることによって、私は、私が自分の「悲しい」状態に「悲しむ」ことができる限りで、その状態に居直っていることができるなくなるだろう。そして、「悲しみ」に含まれるこの動きに付き従うことを私が私の主体的原則（格率）とすることができるならば、そのときはじめて、私は意志以前のものを、それが私の自由に由来するものではないにもかかわらず、私の責任として、あらためて意志的に引き受けるということが生じるだろう。

#### 4 悲しむ力はどこから？

では、この自分と自分の同類との「悪と不正と卑劣」について「悲しむ」力はどこから生じるのだろうか。また、なぜその力はそれらを「悲しむ」力であって、それらを例えば「怒る」力あるいは「恐れる」力ではないのだろうか。この問いについて考えるために、再び、ソ・ジュンシクの獄中からの手紙を取り上げたい。

ソ・ジュンシクが悲しんだ自分の中の「悪と不正と卑劣」というのは、例えば次のようなことだった。

「幼稚園に通っていたとき、私は、何も分からないで、友達と一緒に棒切れの刀で〈武装〉して、（中略）〈タケオ〉という〈朝鮮野郎〉を成敗しに行ったことがありました。5、6人にもなるわれわれにワアワア泣き声をあげながらがむしゃらに石を投げては線路の上を逃げていった、涙だらけになった〈タケオ〉の顔が、いまもありありと目に浮かびます。」<sup>14)</sup>

幼稚園児のソ・ジュンシク（そのとき彼は、自

分のことを朝鮮人であるとは自覚しておらず、「福田光男」という日本人だと思っていた）は、「〈タケオ〉という〈朝鮮野郎〉を成敗」しにいった自分がその彼と同じ朝鮮人であることも「分からない」で、敵を「成敗」という子供じみた正義感に浮かれて、「友達と一緒に」なって「タケオ」を恐怖感と悲しみの中に追い込んでしまった。そのことを彼は、それから約30年後のこのときに、「他人に見せられないほど恥ずかしい、そんな傷痕」として「苦痛に満ちた悔恨」<sup>15)</sup>とともに思い返している。

ソ・ジュンシクは、また、ある手紙で、その2年前に亡くなった母を回想しながら、次のように記している。

「いま私の目には、むかし、私との面会に通われていた頃のオモニ〔母〕の姿が次から次と浮かんでくる。殺風景な事務室で、机に座って新聞ばかり見てオモニに目もくれない〈お偉方〉に10回以上もひとりでベコベコ頭を下げてあいさつなっていたオモニを見て私は、なぜか恥ずかしくて、見苦しいと思っていたのだ。だからそのとき私は、人々と一緒になってオモニを心で虐待していたのだ……。」<sup>16)</sup>

彼は、生前の母を、同じ手紙の前の部分で、「彼は侮られて人に捨てられ／悲しみの人で、病を知っていた／また顔をおおって忌みきらわれる者のように／彼は侮られた」あの「苦難の僕」（『イザヤ書』53章）になぞらえながら、今となっては「悲しみの人」というべき自分の母を、当時、母の卑屈とも映る姿を自分が「見苦しい」と思うことによって、人々と一緒になって「心で虐待していた」のだ、と回想している。

これらの回想の中でソ・ジュンシクが悔恨とともに悲しんでいる彼の「悪」は、いずれも、人を悲しみの中に自ら追い込んだり、あるいは、少なくとも、人を悲しみに追い込む人々と同じ側に自分が立ったりする、ということである。つまり彼

にとって、「悪や不正や卑劣」という「人間の悲しみ」というのは、人を、ある種の正義感や潔癖心からであれ、「悲しませる」集団の側に立ってしまうということである。そして、自分が悲しませた人は、自分の同胞（はらから）たるべき人であり、また、母（はら、そのものを示すもの）である人だった。だから、彼は、「侮られ、人に捨てられ」る人の悲しみの感情に自分がいわば染まる（感染する）<sup>17)</sup>ことによって、自らの悪を悲しみとして感じているのであり、したがって、彼にとっては、「人間の悲しみ」を悲しむ感情というのは、その悪によって「侮られ、捨てられ」る人の悲しんでいる感情を自らに引き取った結果として生まれている、と言えるだろう。そして、そうした感染や引き取りが可能であったのは、悲しまされて悲しんでいる人を彼の同類（はらから、あるいは、はら、そのもの）でもあると感ずることができたからだろう。彼が「人間の悲しみ」を悲しむことができ、また、彼にとってそれが「悲しむ」力であったのは、そのような事情によるものと思われる。だとすれば、悲しむ力は、ある種の感染力を通して感じ取られ、学び取られるものなのだとはいえる。そして、自分の「悲しい」状態を悲しむという、ほとんど意志とも言えるような動きは、自発性の性質を持つとともに、そのような動きへと促されるという、受動性の性質をも持つことになる。だとすれば、人を「侮り、捨てる」という意志以前の悪に対する責任は、まずは、そうした責任へと私が、悲しむ人の悲しみに促されることによって成り立つ、と言えるだろう。<sup>18)</sup>

## 5 拘束を自由へ

一般に、感情は人を拘束し、理性は人を自由にすると言われる。確かに、ある感情に取り憑かれることは、人をその場の事態に閉じ込めるのに対して、概念による把握や推理は、人を風通しのよい戸外に連れ出してくれる。しかし、ソ・ジュン

シクの獄中での「生の実験」<sup>19)</sup>を迎えることにおいて浮かび上がってきたのは、拘束と自由のそのような二元対立ではなく、感情へ拘束されることが私を、責任によって可能となる自由へ向かって動かす（強く言えば、感情に拘束されることが私を責任へ向かって自由にする）ということだった。

もちろん、同じ感情といっても、ほとんど反射と区別できないような感情もあり、あるいは、反復、持続する状況が澱のように心に積もっているような感情もあり、さらには、「人間の悲しみ」の場合のように、ほとんど意志と区別できない感情もある。反射に近い感情は、人の心に一瞬の波紋を生み、時には突発的な行動を生んでは、しかし、まるで何事もなかったかのように、また消えていく。あるいは、心に澱のように積もった感情は、一種の習慣のごときものとなって、人をその現状に閉じ込めてしまう。しかし、意志に近い感情は、もしそれが抑圧されることがなければ、人の心を強く揺さぶる。そして、そのほとんど意志と区別できない感情が「人間の悲しみ」を「悲しむ」力である場合には、その感情は、私を、「人間の悲しみ」に対する責任へと向かって、自由へと向かって、動かすだろう。そして、その動きを意志的に受け止めることができたとき、私は感情に拘束されながら、同時に自由であると言えるようになることだろう。そのときには、私の回顧の眼差しの前に、意志以前のものであった私の「悪と不正と卑劣」は、自らの意志によって自由に選択された道徳的な悪として、私に立ち現れてくるだろう。

あらためてソ・ジュンシクの文章を引用する。

「突き詰めてみれば、すべての人は大小さまじまの拘束の中で生きていくのではないか。一つの拘束を逃れると、それと同時に別の拘束の下に陥らざるをえないのだ。（中略）人間がこうした束縛から自由になろうとすれば、存在をやめるしかない。死なねばならないのだ。死ねはしないでは

ないか。所詮は拘束のなかで生きていくものなら、われわれは束縛する可能性のあるすべての拘束のなかで最も美しく、最も高貴で甲斐のある拘束を捜し出し、そこに我が身を委ねねばならないだろう。(中略)しかし、いくら美しく高貴なものへの束縛だといっても、それを拘束だと思うかぎり、どうしてもそれは奴隷的生でしかありえない。(中略)この拘束の生を自由意志の生へと変えてしまわねばならないのだ。(中略)重要なのは束縛から逃れることではなく、束縛の中での、束縛との妻まじい闘いだ。(中略)こうした過程を経てわれわれは、溢れる喜びでその束縛に身を委ねることが出来るようになるだろう。つまり、束縛は自由となる。』<sup>20)</sup>

「束縛の中での、束縛との妻まじい闘い」を通してはじめて「自由意志の生」が可能になる、とソ・ジュンシクは言う。そして、この「自由意志の生」は、彼にとっても、すでに獲得された現実ではなく、遙かに望み見られる、ただし、すでに切実に追い求められる、希望の対象だったろう。この「妻まじい闘い」の過程に立ち入っていく力量は、私にはない。私がここでできることはただ、ソ・ジュンシクにおいても、彼を最も深いところで拘束していたもの、そして、その拘束に「溢れる喜びで身を委ねる」ことを彼が希望として追い求めていたものが「人間の悲しみ」への拘束だったのではないか、と言うことにとどまる。

カントが教えてくれるように、人間の道徳性にとっては、行為の(格率採用の)動機としての「(道徳法則に対する尊敬の)感情」が要の位置にある。ある種の感情の力を離れては人は道徳性に与かることはできない。そして、この「感情」を仲立ちにして、客観的な道徳法則(理性[ないしは意志]の純粋な形式が人間に向かって迫りくる姿、とでも言うべきもの)から出発して「人間の悲しみ」に至ることもできるのかもしれない。もし、そうしたことが可能であるならば、人が意志

以前のものに責任を取るということも、「人間の悲しみ」を悲しむという感情から出発せずとも可能なかもしれない。しかし、カントは、人間において意志(ないしは理性)そのものを可能にする条件の問題に突き当たるたびに(私としては、この問題から、意志[ないしは理性]以前の事柄への通路が開かれてくると思えるのだが)、その問題には踏み込まずに、意志(ないしは理性)の「事実」<sup>21)</sup>を確認するところで立ち止まる。<sup>22)</sup>「われわれ人間の洞察はすべて、われわれが根本諸力ないしは根本諸能力に至るや否や、終わる」<sup>23)</sup>からである。そして、この「根本力に至る」ことが、「人間理性の限界にまで諸原理において至ろうと努力する哲学に正当に要求されうるすべて」<sup>24)</sup>であると語る。確かに、哲学にとって、意志(ないしは理性)の可能性を確保することへの関心を最優先させること(「実践理性の優位」)は、ある意味ではきわめて正当な姿勢だろう。なぜなら、そこにこそ道徳の存立がかかっているからである。しかし、その結果として、意志(ないしは理性)自身は、意志以前のものに対する関心をなおざりにしがちになる。そして、先にも触れたように、意志以前のものが、意志自身の可能性の確保を配慮しあう意志たちの輪から締め出される、ということが起こりうる(なぜなら、そこでは、意志の可能性は、それが意志以前のものに引き摺られない純粋な形式を採ることにあるとされるのだから)。

このことを避けるためには、意志の可能性の条件は、意志以前のものに感染し、意志以前のものに対して(「悲しみ」という)感情の場で開かれることのできる人間の力のうちに求められねばならないだろう。

## 6 おわりに

意志以前の、もって生まれた本性から人を「侮り、捨てる」ことによってその人を「悲しませ

る」人間の悪を、その悲しむ人の悲しみに感染することによって「人間の悲しみ」として受け止め、そことによって「人間の悲しみ」を悲しむ力へと開かれるということは、人間において自由が「自生」(ソ・ジュンシク)することができるという希望を生み出してくれる。

しかし、そうした希望と同時に、次のような疑念が私に生じてくる。

自らの(そして「同類」としての「人間一般」の)道徳的な悲しさを直視しつづけるということは、人を深いメランコリーに陥れないだろうか。人は、ついには、そうした悲しさの重みに耐えかねて、崩壊してしまうのではないだろうか。人間には、自らの道徳的な悲しさを見詰めることはできないのではないか。生き延びるということは、その悲しさに幾分かは目を瞑ることを意味するのではないか。したがって、人間は、つまるところ、意志以前のものに対する責任を十全に担うことはできないのではないか。責任を担って生きること(死んでしまわないこと)は、必ずどこかで自らの道徳的な悪と馴れ合うこと(生きることについてまわる「人間の悲しみ」としての「悪と不正と卑劣」を悲しむことをどこかで抑制すること)を意味するのではないか。

反対に、こうした不純なあり方を嫌悪し、純粋な自由に対する欲望に駆られ、この悲しみの抑制を抑圧に変えて、自分の生を、自由への接近という肯定的価値に彩られたものとして意味付けしてしまうとすれば、それはまた、ひとつの新たな道徳的な悪を生み出すのではないか。

どうすれば、責任の重さに耐えながら、しかも、それが漂わせる自由の予感の喜びに誘惑されずにいることができるのだろうか。そもそも、そうしたことは可能なのだろうか。

しかし、この疑念についても、先のソ・ジュンシクの「妻まじい闘い」の場合と同様、私は今、語る言葉をもっていない。

注

- 1) Kant, Immanuel, *Die Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft*, Kants Gesammelte Schriften, Akademie Ausgabe Bd. VI (以下, A. VI と略記), S. 21.
- 2) *ibid.*, S. 36.
- 3) *ibid.*, S. 31.
- 4) *ibid.*, S. 32.
- 5) Kant, Immanuel, *Kritik der praktischen Vernunft*, Kants Gesammelte Schriften, Akademie Ausgabe Bd. V (以下, A. V と略記), S. 82.
- 6) A. VI, S. 21.
- 7) 서준식 (徐俊植)。1948年生。元在日朝鮮人。1971年3月から1988年5月まで政治囚として韓国の獄中にあり、釈放後、現在、韓国ソウルで人権運動家として活動中。
- 8) 서준식 『옥중서간집 2 새벽의 절망을 두려워 않고 (獄中書簡集 2 曉の絶望を恐れず)』, 1989, 281쪽。(ソ・ジュンシク 『全獄中書簡』, 拙訳, 1992, 487頁)
- 9) ソ・ジュンシク 『自生への情熱』, 拙編訳, 1995, 237-8頁。(原文は韓国では未発表)
- 10) 서준식 『옥중서간집 3 고뇌속에서 떠오르는 희망 (獄中書簡集 3 苦悩の中から浮かび上がる希望)』, 1989, 17쪽。(『全獄中書簡』 586-7頁)
- 11) Kant, Immanuel, *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*, Kants Gesammelte Schriften, Akademie Ausgabe Bd. IV (以下, A. IV と略記), S. 412.
- 12) *ibid.*, S. 427.
- 13) *ibid.*, S. 412.
- 14) 서준식 『옥중서간집 1 모래 바람 맞은 영혼 (獄中書簡集 1 砂風に打たれた魂)』, 1989, 399쪽。(『全獄中書簡』 277頁)
- 15) 위와 같음(同上)。
- 16) 위 책(同上書), 319쪽。(『全獄中書簡』 221-2頁)
- 17) カントは、『道徳の形而上学』において、「人間らしさ (humanitas)」を、「たんなる理性的存在者」としての人間ではなく、「理性を賦与された動物」であるかぎりの人間にとって(つまり



「条件付きでのみ」義務であるとし、その場合でも、「互いに、自分の感情について伝達しあう能力と意志」としての「実践的な人間らしさ (humanitas practica)」のみがそうした義務であって、「喜びや苦しみという共通の感情に対して、自然が自らに与えている感受性」としての「直感的な人間らしさ (humanitas aesthetica)」は義務ではないとし、後者について「感染的 (ansteckend)」という形容詞を用いている。カントが後者を、「理性を賦与された動物」としての人間にとってすら道徳的な義務ではないとするのは、それが「不自由で、隷属的」だからであり、「共に生活している人々の間で自然に広まる」ようなものだからである。(Kant, *Die Metaphysik der Sitten*, A. VI, S. 456f.) 筆者が本文で「人の悲しみの感情に自分が染まる (感染する)」という表現を用いて示そうとしている事態は、本文の他のところでも記しているように、「受動的」でもあり、したがって、ある面ではたしかに「不自由で、隷属的」であろう。筆者も、この点を踏まえて、「人の悲しみの感情に自分が染まる (感染する)」という動きを、「十分な意味で自由であるとは言えない」と断っておいたのである。他方しかし、それは、「人々の間で自然に広まる」ものではなく、したがって、「もはや自然そのものではない」ような感情でもある。自由か不自由か、意志か自然か、という二分法には収まりきらない事態を、筆者は、読者の抵抗感を予想しながらも、あえてここで「感染」という語を用いて示したのである。——さらに付け加えれば、上の「共に生活している人々の間で自然に広まる」というカントの表現とも関わって、「感染」から出発して「倫理」の可能性を探ろうとする筆者のここでの試みに対して、それは「感情伝染の共同体」という閉鎖空間のなかへ人々を誘う危険な試みではないか、という懸念が当然生じるだろう。こうした疑念を、十分な説得力をもって鎮められるだけの理論的準備は、残念ながら、今の筆者にはない。しかし、筆者のこうした試みの目指すところが、現状においては人々を呪縛しているそうした閉鎖空間からの脱出の途を探ること

である、ということだけは、力説しておきたい。「人間の悲しみを悲しむ力」を手掛かりとして「いまある有り様とは異なった別の有り様へ至ろうとする動き」を探り出したい、というのが、筆者のここでの趣旨なのである。

- 18) 野田正彰は、第二次世界大戦中の中国大陆での日本軍による中国人捕虜を「材料」とした「手術演習」(生体解剖、「日本の軍人を救うため」と理由づけられていた)に加わった一医師が、敗戦後、中国軍の捕虜収容所の中で「罪状告白」をするに至る過程を、彼が「犠牲者をものから人へ(中略)取り戻し(中略)それは、彼自身がものから人へ、自我を見いだしていく過程でもあった」と記している(『戦争と罪責』, 1998, 38頁)。そして、その「取り戻し」、「見いだし」の過程を、「切り開いた臓器は眼前に浮かんでも、無念の思いを秘めた顔貌は想起しない」(同上, 35頁)というところから、「犠牲者」の母親の告訴の手紙に「わたしは悲しくて悲しくて、涙で目がつぶれそうだった」(同上, 34頁)と書かれているのを読んだことをきっかけに、その「犠牲者」を「生きた表情のある人間」(同上, 38頁)として想起できるようになっていく過程として描いている。また、野田は、中国大陆における日本軍による「『ウサギ狩り』作戦(奴隷化)」に加わった一中隊長が、中国の戦犯管理所から釈放されて日本に帰国した後で、かつて部下に命じて子供二人を含む家族5人を「一発の弾で」(同上, 137頁)殺させたときに翌日になっても死に切れずにいた「下の子供」の顔を、その子と同年くらいになった自分の息子の寝顔を見ながら想起することによって(ソ・ジュンシクも、「涙だらけになった〈タケオ〉の顔」をありありと思い浮かべている)、「より直接的な体験の想起」としての「罪責感」(同上, 133頁)を抱くに至る過程を記し、最後に、「悲しみ悲しめることこそが、小島さんを感情をもった人間たらしめている。殺した者も悲しみを持ちうる。(中略)[自分が殺させた子供の顔を想起した]このとき、小島さんが殺した人々は初めて顔を持ち、感情を持ち始めた。それは、小島さんが人間としての感情を取り戻すことでもあった。

戦争に直接かわらなかつた世代も、(中略)彼の本当の悲しみ、戦争における罪を意識して生きる意味を聞きとることによって、強張った歴史観から自由になれる。」(同上、146頁)と記している。

- 19) 서준식『옥중서간집 1』, 323쪽. (『全獄中書簡』 224頁)
- 20) 서준식『옥중서간집 3』, 389-390쪽. (『全獄中書簡』 852-3頁)
- 21) A. V, S. 31.
- 22) ビヒトは次のように述べている。「カントは、『自己認識という理性のすべての仕事のうちで最も困難な仕事をあらためて引き受けるように、という理性に対する催促』を、彼の時代の歴史状況から引き出した。しかし彼は、ある事柄を可能にする諸条件を問うという超越論的な問いをまだ理性それ自身にまで向けることができなかった。なぜなら、カントが理性の自己認識を形而上学的なかたちで遂行しているために、理性は自分自身の本質や自分の無時間的(と思

なされた)構造をいまだ独断的に前提しており、そのために、自分自身の前提に溯ってさらに問いを押し進めることができないからである。」

(Picht, Georg, *Wahrheit Vernunft Verantwortung*, 1969, S. 7.)

23) A. V, S. 46f.

24) A. IV, S. 463.

〈後記〉この論文は、1997年10月、日本倫理学会第48回大会でのシンポジウム「現代社会と悪」に先立ち、「悪」を全体テーマとして行われた共通課題研究発表において、「悪と自由意志一人間の自由意志が悪を生むのか」と題して筆者が行った口頭発表のための原稿を土台とし、それに若干の補筆を加えたものである。発表要旨とシンポジウムでのやりとりの概要は、『倫理学年報第47集』(1998年3月)に掲載されている。なお、引用はしなかったが、拙論は次の論文にも多くを負っている。Picht, Georg, *Über das Böse*, in: *Hier und Jetzt, Philosophieren nach Auschwitz und Hiroshima*, Bd. II, 1981.